西日本新聞 文化欄

1988 年九月二十六日~十月八日

持長い沈黙から抜け出して....

評論家打ち負かす

大牟田市で画塾「西部美術学園」を主宰する働正は「九州派の理論家」と呼ばれていた。難解な論理を延々と展開する働に、意味がよく理解できないメンバーたちも一目置いていたという。

東京展に向かう列車内で、両手を後ろ手に縛って通路に転がったり、全身を包帯で巻いて福岡市の繁華街に寝転がるハプニングを演じた働は、解体直前の九州派を飛び出している。運動を理論づけようとして理解されず、結局は孤立して去った。多くを語りたがらないが、内部の葛藤は若者の心を深く傷つけたようだ。それ以降、メンバーたちの交渉はほとんどなくなる。

仲間の作品を打ち砕いた論理は、自らの制作をも封じ込めた。九州派時代の自分から逃れようとでもするように、画塾での教育だけにのめり込んだ。絵を描こうと思うまでに二十年近い歳月を要する。

今年九月二十五日、福岡市美術館で九州派展シンポジウムが開かれた。パネリストとして増上にいた働は「理論家だなんて」と照れた。美術評論家の針生一郎は「謙そんだ。評論家をつるし上げたもの」と、暴露した。働の弁舌は、相当に鋭かったようだ。

伝習館闘争にも

「芸術とは関係なく、共同作業で人間とは何かをさぐる運動でなければ」と思っていた。それ

は理解されずに、逆に「理論ばかりが先行して作品が少ない」と責められたこともあったようだ。仲間とのずれがむなしさを増幅した近親憎悪に近い感情も生まれたのだろう。

安保闘争は盛り上がったが、終わってみれば、皆、各人の家庭に戻っていった。高揚が止まった九州派は使命を終えた、と思い、決別した。

働は四十年に北九州市から大牟田に移った。大牟田の前衛グループ「新芸術集団」から九州派に加わっていた谷口利夫(福岡市)が主宰していた西部美術学園の面倒を見てくれと頼まれたのだ。「谷口さんがアメリカに行く一年間だけのつもりだった。だが彼は行かずに福岡市に新しい西部美術学園を開いたので、後を継ぐことになった」

大牟田に近い柳川市で教職員処分に反対する伝習館闘争が起きた。この最中の四十五年、九州派とつかず離れずで行動していた北九州市の集団「蜘蛛(くも)」のメンバーが、性器を描いたむしろ旗を揚げて警察に連行された。九州派の数人も支援したが、最後に残ったのは、特別弁護人を引き受け、ガリ版を切って冊子を出し続けた働だった。結局「表現の自由」を掲げた闘いは敗北して有罪。また画塾にのめり込む。

児童画に専念

うまく描くことよりも、個性を重視して年齢に合った絵を指導する働の画塾は盛況で、五十年ごろには百人を超えた。児童画展で団体賞を受けたりもするが、働の内面では、それでいいのかとの疑問が起きた。指導には従うが、自ら考えて行動することのない現代の子供たちを何とかしなければ、と思った。

六十年に小学生十人と版画による絵本「海にねむる龍」を完成させた。大牟田の大蛇山祭りや三池に伝わる伝説を素材に、子供たちが現代の民話を創作、版画を彫った。祭りや市内各地の取材、伝説の聞き取りなど、二年がかりの労作だった。働がガリ版を切り、子供たちが製本もした五十一部の手作り絵本は評判になり、その年、福岡市の出版社で本になった。

押し付けでなく、子供たちに自分たちの、ふるさとを愛する心を育てたいとも思いながら本作りを進めるうちに、働の内部にも制作への意欲が発酵してゆく。出版と前後して、紙と取り組み始めた。

制作活動を再開

鉛筆とパステル、水彩によるさまざまな色の直線が交錯し、細密に描き込まれた紋様や小さい円が響き合うマンダラのような作品が次々に生まれた。「描く時間がない」と制作を拒否していたのがウソのように、塾の傍らで日に十時間も描くこともあった。

一年がかりの三十余点を六十一年に福岡市の画廊で発表した。三十九年、東京・内科画廊以来二十二年ぶりの個展だった。翌六十二年、熊本市で個展。前年に比べて色彩や形が多様になり、自在なリズム感が生まれてきた。最近は「紙から呼ばれるような気配を感じる」と言う。

次の手作り絵本の構想もある。「子供たちの大牟田」と題して「遊び、父母の仕事、街の表

情を考える。十年かかるかもしれないが、その間に私も立ち直る」と明るく笑った。

前衛たちの軌跡

九州派から四半世紀

〈8〉

長い沈黙から 抜け出して…

働 正(54)

〈大牟田市〉

評論家打ち負かす

大牟田市で画塾「西部美術学園」を主宰する働正（はたらき・ただし）は「九州派の理論家」と呼ばれていた。難解な論理を延々と展開する働に、意味がよく理解できないメンバーたちも一目置いていたという。

東京展に向かう列車内で、同手を後ろ手に縛って通路に転がったり、全身を包帯で巻いて福岡市の繁華街に寝転がるハプニングを演じた働は、解体寸前の九州派を飛び出している。運動を理論づけようとして理解されず、結局は孤立して去った。多くを語りたがらないが、内部の葛藤は若者の心を深く傷つけたようだ。それ以降、メンバーたちの交渉はほとんどなくなる。

仲間の作品を打ち叩いた論理は、自らの制作をも封じ込めた。九州派時代の自分から逃れようとでもするように、画塾での教育だけにのめり込んだ。絵を描こうと思う手に三十年近い歳月を費やす。

今年九月二十五日、福岡市美術館で九州派展シンポジウムが開かれた。パネリストとして壇上にいた働は「理論家だなんて」と照れた。業績評論家の針生一郎は「謙そんだ。評論家をつるし上げたもの」と暴露した。働の発言は、相当に鋭かったようだ。

伝習館闘争にも

「芸術とは関係なく、共同作業で人間とは何かをさぐる運動でなければ」と思っていた。それは理解されずに、逆に「理論ばかりが先行して作品が少ない」と責められたこともあったようだ。仲間との近親憎悪に近い感情も生まれたのだろう。

安保闘争は盛り上がったが終わってみれば、皆、各人の家庭に戻っていった。高揚が止まった九州派は使命を終えた、と思い、決別した。

働は四十年に北九州市から大牟田に移った。大牟田の前衛グループ「新芸術集団」から九州派に加わっていた谷口利夫（福岡市）が主宰していた西部美術学園の面倒を見てくれと頼まれたのだ。「谷口さんがアメリカに行く一年間だけのつもりだった。だが彼は行かずに福岡市に新しい西部美術学園を開いたので、後を継ぐことになった」

大牟田に近い柳川市で教職員処分に反対する伝習館闘争が起きた。この最中の四十五年、九州派とつかず離れずで行動していた北九州市の集団「蜘蛛（くも）」のメンバーが、性器を描いたむしろ旗を掲げて警察に連行された。九州派の数人も支援したが、最後に残ったのは、特別弁護人を引き受け、ガリ版を切って冊子を出し続けた働だった。

結局「表現の自由」を掲げた闘いは敗北して有罪。また画塾にのめり込む。

児童画に専念

うまく描くことよりも、個性を重視して年齢に合った絵を指導する働の画塾は盛況で、五十年ごろには百人を超えた。児童画展で団体賞を受けたりもするが、働の内面では、それでいいのかとの疑問が起きた。指導には従うが、自ら考えて行動することのない現代の子供たちを何とかしなければ、と思った。

六十年に小学生十人と版画による絵本「海にねむる龍」を完成させた。大牟田の大蛇山祭りや三池に伝わる伝説を素材に、子供たちが現代の民話を創作、版画を彫った。祭りや市内各地の取材、伝説の聞き取りなど、二年がかりの労作だった。働がガリ版を切り、子供たちが製本もした五十一部の手作り絵本は評判になり、その年、福岡市の出版社で本になった。

押し付けでなく、子供たちに自分たちのふるさとを愛する心を育てたいとも思いながら本作りを進めるうちに、働の内部にも制作への意欲が発酵してゆく。出版と前後して、紙と取り組み始めた。

制作活動を再開

鉛筆とパステル、水彩によるさまざまな色の直線が交錯し、細密に描き込まれた紋様や小さい円が響き合うマンダラのような作品が次々に生まれた。「描く時間がない」と制作を拒否していたのがウソのように、塾の傍らで日に十時間も描くこともあった。

一年がかりの三十余点を六十一年に福岡市の画廊で発表した。三十九年、東京・内科画廊以来二十二年ぶりの個展だった。翌六十二年、熊本市で個展。前年に比べて色彩や形が多様になり、自在なリズム感が生まれてきた。最近は「紙から呼ばれるような気配を感じる」と言う。

次の手作り絵本の構想もある。「子供たちの大牟田」と題して「遊び、父母の仕事、街の表情を考える。十年かかるかもしれないが、その間に私も立ち直る」と明るく笑った。

（吉田 浩記者）

九州派展 10日まで、福岡市中央区大濠公園、福岡市美術館。

アトリエの働正さん

＝敬称略＝